

寅彦の見た風景 2

野村 学

はじめに

前号に引き続き、寅彦日記に登場する場所や出来事について文章と写真で紹介したいと思います。日記と地図を片手に寅彦先生ゆかりの場所を訪ねるのは本当に楽しいものです。また日記に登場する出来事をその時代に即して調べてみると意外な事実が分かることもあり知的好奇心をも満足させられます。しかしこれは私の不勉強から来るところであって、会員の方々には既知のことあるいは常識のことも多いことと思います。この点、拙稿は寅彦研究などというものではなく個人的な寅彦散策の記録として捉えていただけたらと思います。

事実関係には充分注意を払ったつもりではありますが誤りなどありましたらご指摘ください。

【楠病院編】

「楠病院なる楠目氏を訪ふ 手術后経過よしとなり弟君も来れり。」

(明治 35 年 4 月 5 日の日記・『寺田寅彦全集』第 18 卷 1998 年より)

この日、寅彦は楠目氏を見舞いに楠病院を訪れた。手術を受けた楠目氏がどのような人物なのか、ここでは深く掘り下げることができないが、日記に記されている限りではこの日以降も二度ほど見舞いに訪れている。

寅彦の訪れたその楠病院。『月刊土佐 第 46 号』(和田書房・1999 年)を参考にすると、現在の高知市追手筋 1 丁目 9 番地のブロック東半分という広大な敷地を占めていたようだ。右図に示すように、南の柳町の通りと北の追手筋の通りに挟まれたブロックの一角が楠病院であった。



『ふるさとの思い出 写真集 明治・大正・昭和 高知』(寺田正編・椋国書刊行会・昭和 54 年)では明治末年に写された写真とともに楠病院が紹介されている。それによると「明

治二十三年に設立、内科・外科・産婦人科・耳鼻咽喉科を持つ高知市屈指の大病院であった」そうだ。また『寺田寅彦全集 第一巻』（1996年）に収録されている「追憶の医師達」には次のような記述がある。「一二、三歳の頃ひどく体が弱くて両親に心配をかけた。そのためにその頃郷里でただ一人の東京帝国大学卒業医学士であったところの楠先生の御厄介になることになった」。ここに登場する楠先生がこの楠病院の院長・楠正任先生

（1860-1918）であることは間違いないだろう。続けて「この先生はたいていいつも少し茶色がかった背広の洋服に金縁眼鏡で、そうしてまだ若いのに森有礼かリンカーンのような髯を生やしていたような気がする」とあるが、『高知県人名事典 新版』（高知新聞・1999年）にはまさに背広の洋服に口髯を蓄えた楠先生の写真が掲載されている。「近代的な西洋人風な感じのする国手」と表現した楠先生の姿も寅彦の見た風景の一つといえるだろう。

さて前述の明治末年に写された写真には、切妻屋根の載った立派な正門前に立つ白衣を着た看護婦さん七、八人の背後に、これもまた立派な寄棟造の屋根を持った大きな病院の建物が写っている。正門は追手筋に面していたようだ。正門の脇には自転車（人力車？）も見られる。下の写真はその写真が撮られたのと同じ場所、同じ角度（と思われる場所、角度）から撮ってみたもの。その昔寅彦が訪れた大病院も今はなく、その場所のほとんどを有料駐車場や雑居ビルが占めている。楠病院を知らない私はただ想像の中で追憶するほかはない。



楠病院があったと思われる場所付近

【天神橋・楠編】

「午後独り家を出て天神橋を渡り、堤の上をぶらぶらする。涼しい風が楠の木陰を吹き通して河には鮎かけの人々、水泳ぐ子供の裸も見へる。」

(明治 35 年 7 月 8 日の日記・『寺田寅彦全集』第 18 巻 1998 年より)

梅雨の晴れ間か梅雨明けの後か。7月初めのある晴れた日、寅彦は独り散歩に出かけた。足の向くまま街の南を東西に流れる鏡川までやって来た寅彦は、そこに架かる天神橋を南へ渡った。

『高知市歴史散歩』（広谷喜十郎・2003 年）によると、天神橋は「元和 8 年に藩主が真如寺や藩祖の墓へ参詣するために架けられたもの」とあるから歴史は古い。また同書には「明治 30 年 7 月の天満宮の夏祭りの際、大勢の参拝者の重みで橋が落ちて多くの負傷者を出したという。その後、一時は橋が撤去されて仮橋になったこともあった」とある。とすると、この日寅彦が渡った天神橋は仮橋の状態だったのかもしれない。



手前の橋が天神橋・天神橋南詰（奥）の茂った樹木が楠



天神橋南詰にある楠

さて天神橋を渡った寅彦が「涼しい風が楠の木陰を吹き通して・・・」と描いた情景。ここに登場する楠は、おそらく天神橋南詰に今も残る楠の大樹のことだろう。高知市公式 HP (<http://www.city.kochi.kochi.jp>) によると、この大楠は樹齢推定 400 年、樹高 25m、目通り周囲 7.5m、根回りおよそ 20m。昭和 42 年 2 月 3 日に「天神町のオオクスノキ」として高知市の天然記念物に指定された。「樹冠は東西 15m、南北 18m、市街地の中、鏡川に沿って周囲を遮るものがない独立樹なので、樹冠を美しく張ったその姿は、まことに目立つ存在である」（高知市公式 HP）。樹齢 400 年とあるからおよそ 100 年前に寅彦が歩いたこの日もここに在ったはずである。その証拠に『高知城下町読本-改訂版』（高知市・平成 16 年）に掲載されている『明治 26 年作 旅行必携 新撰高知市街地図』にも「名木 天神の樟」と記されている。